

# Now, Basic Hair Salon & Esthe

こだわりの技術はまずシャンプーから  
カット、スタイル、カラーリング…  
トータルコーディネイトが基本で自慢

CUT ADULT	¥3500
PERM (ニュアンス)	¥8000~
COLORING	¥5000~

## Esthe Campaign 12/1~12/31

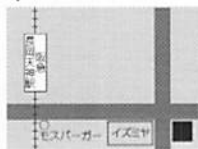
Facial	
Basicコース	¥2000
リラクシングコース	¥4000

※キャンペーン中、通常1500円のシェービング(お顔そり)サービス

Body	
アロマフットマッサージ	¥2000→¥1800

Body	
バックトリートメント (背中)	¥3000~
まつげカール	¥3000

## Total Beauty Support Raum-K ラウム ケイ



長岡京市開田4丁目9-6  
Tel.075-953-5748  
OPEN~CLOSE  
平日10:00~19:30  
日曜日9:00~18:30

パーマ・ヘアカラー受付  
平日~17:30日曜日~16:30

カット受付  
平日~19:00日曜日~18:00

定休日  
毎週月曜日/第二・三火曜日



# VJ micro micro

KYOTIAN I.D.

キョーティアンアイディ

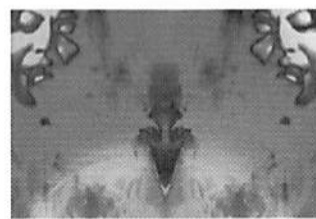
マイク ロ ・ マイク ロ

左から、抜群のセンスでカラー系担当・梶裕佳子(かじ・ゆかこ) '81年生まれ、編集統括とマネージメントの松下ひとみ(まつした・ひとみ) '80年生まれ、アイデアマンの洞野由美(ふちの・ゆみ) '81年生まれ、嵯峨美短大ビジュアルデザイン科卒業・在学中。'00年9月結成、同年12月デビュー

VJとは……

Visual Jockeyの略。クラブイベントなどで、DJが流す音楽と共に自作した映像を流す人をさす。楽曲や聴衆の変化に合わせて映像も変化する

## オトコ社会に物申す！ 見よ、ギャルVJの心意気



「VJ会議」でビザなどつまみつつ話し合い、三人頭を寄せ合って映像の骨子は決まっていた



「ギャルが4機材に埋もれて演じてるところって、絵面だけでも面白いでしょ？」確かに違和感、でもそのVJには圧倒感



音の基本は四ツ打ちのアップビート。「苦手だったジャズやヒップホップの生音も最近では面白くなってきた」

**Information**

**Les Plus X'mas**  
DJ-田中知之 (F.P.M)、梶野彰一 他  
12月14日 場所:METRO 時間:22:00~  
料金:3000円  
●問い合わせ先 090-9881-0856 (松下ひとみ)  
hinagiku@orion.auric.ne.jp

ショッキングピンクや網のタイツに、ラメラニット。いかにも「ギャル！」な服装に身を包んだ三人娘は、駆け出し&売り出し中のVJユニット。そんなもアリか、とギャルパワーに圧倒されそうになったがしかし、三人が俄先に語り出すのは「これはね、VJやる時だけのカッコ」「そうそう、目立つためにね!」「やっぱオンナの輝きを表現するにはギャルでしょう」等々。コスプレと言うよりはむしろ戦略なのだと言う。モノクロームな男性が多いVJの世界でこのキャラが目立たぬ訳がない。いっぽう手掛ける映像についても「女の子っぽいね、可愛いね」との評は多いというが、こちらは狙ってのものにあらず。カラフルでポップなビジュアルは、彼女達の自然体だ。戦略のギャルの殻からにじみ出る少女らしさ。ツボを撃たれるファンは増加の一途をたどる。

三人はそれぞれビジュアルデザイン科に在籍はしていたものの、「学校では動画は教えてもらわないから、VJは完全に独学。それに映像だけじゃなくて、音と映像がシンクロするって状況が好きなんです」。イベントで客として見ているだけでは我慢できず、旅振役のヒトミちゃんが学校の掲示板にVJパートナーを募集したところから、micro microは始まった。「初めて会ったとは思えへんフィーリングやったんですよ、ウチら」と言うほど、最初からハジけまくりの異口同音トークが炸裂。出かけるイベントで会う人会う人に売り込みをかけるうち、映像も加速度的にクオリティを上げ、やがて京都で名を馳せるVJ「ライトブロス」から「ほな、一緒にやってみる?」と誘われるまでに。そのイベントを皮切りに、種を蒔いていた売り込みが一気に発芽。結成からわずか一年足らずで「名前だけが一人歩きしてるかも…」と心配するほどの売れっ子になってしまった。

しかし依然としてDJ主体のクラブシーン、メカニカルな男性主流のVJ業。そんな中でギャルに扮する彼女らは、時に単なるグルービー扱いされるような目にすら遭う。「でもウチらにしか、女にしかできひん表現がある」、優しげな色味や女らしいサイケ調に問わず語り現れる、そのグラウンドは譲れない。地味なカッコで演れないのは、その心意気を最大限に主張するため。少女らしかったビジュアルは目を追うことに少しずつ、女だけが秘めるグロッキー、かと思えばオバカさ、時にはスビリチュアルなとげとげしさをもはらんでいく。女の計り知れない奥深さを見る思い。男がかたうわけがない、そんな部分はもう確かに垣間見えつつある。